

「入学試験学」その後・他*

吉川 敦

九州大学大学院数理学研究院

yoshikaw@math.kyushu-u.ac.jp

1 「入学試験学」その後

前回の「数学教育の会」において、小生は、「入学試験学」という学問分野を建てるべきこと、さらに、学会形式で、広範囲の知恵を結集し、成果を、実際の入学試験や関連の業務に反映させるべきであることを提唱した ([1]¹)。その後、九州大学大学院数理学研究院における FD (平成 15 年 1 月 31 日) 参会者を始め、九大内外の多くの方々に ([1] の写しを) 配布して意見を求めたが、以降の発展は全く十分ではなく、提唱者としては大変申し訳ない次第である。昔から各々の大学において入学試験実施後にさまざまな調査検討がなされてはいるが、その結果を公的な場で論ずるための方式は整ってはいない。九大内では、入試情報を包括的に整理しうる立場の人たちにも連絡をとってはいるが、ご承知のように、入試に関連しては一般に通年で各種の技術的な業務が山積しており、専任者であってもなかなか鳥瞰的な考察をする時間がとれないようである²。

以上、要するに、提唱はしたものの、まだ、しかるべき専門家からの feasibility や relevance に踏み込んだ具体的な見解を得るところまで進んではいない。他方、芳沢光雄氏他の論文 [2] 中で言及があったことを申し添えておきたい。

2 他

さて、以前の「数学教育の会」夏の集会で、自分の子供が大学に入って数年経ってしまうと中等教育に関する (敢えて言えば生命感を伴う) 実体感覚

* 「数学教育の会」2003 年夏の集会 (9 月於学習院大学) 予稿。

¹ この文書の pdf ファイルをお申し出の方に送付します。e-メールでご連絡ください。

² なお、前回の報告では触れなかったが、[3] という書物には、各種の試験のもつ問題点や訴訟対策まで述べられている。[3] に覗かれるのは、実は、engineering あるいは management の発想であり姿勢と言えられるが、これらは対象を冷静かつ正確に観察した上で操作するという業である。

がなくなったということ、そのことが本筋の話題ではなかったが、報告したことがある。小生は、これは恐らく「教育」を業務としていない人にとっては否定のできない正直な感覚ではないかと思う。まあ、お前が鈍感で利己的な奴だから、と言われてしまえば身も蓋もないことかも知れないが、振り返ってみても、親になるまでは幼い子の挙動や引率する親の振る舞いに無関心であったし、また、自身の親が倒れるまで老人介護の問題にも抽象的な理解しか持っていなかった。

言いたいことは「教育」に関しては、昔から多くの人々が似たようなことを見、聞き、また、口にしていたに違いないが、しっかりした客観化の手続きを経ない限り、わが身を本当に離れた公平公正な — つまり、提唱者や担当者の思い付きではない — 見解や（さらに）政策は提案できないという当たり前のことである³。

「入学試験」がこのような話題に属することは明らかであり、「入学試験学」によって、しっかりした客観化を図ろうというのが、[1]の趣旨である。

他方、社会環境の変化の渦中に子育てを経験した我々の世代の観察として、幼児・児童の早教育への疑念がある。最近では、Web コラム [4]、新聞の対談 [5] に、幼児・児童の成長過程からかつてのような自然体験が失われて久しく、その代替は知識教育では十分ではないことが指摘されている。これらの観察は感覚的であり、詠嘆と言ってもよいであろう。基調にあるのは、しかし、何らかの自然体験 — 生物としての人間の成長の追体験とでも言おうか — の重要性である。実際、九大の修士論文 [6] は、Piaget の観察を現在の日本の環境に当てはめて追試した報告であるが、確かに、軽率な早教育には推進当事者の意図しない、あるいは、予想や期待とは背反する効果さえ招来するという問題点が含まれていることがわかる⁴。

現象としての早教育には教育の効率化という意図が潜んでいる。早教育の特徴的な点は、単純な目的設定と目的到達への最短・最速な経済的経路の追求である。設定される目的自体、ある体系の一部を切り取ったものであり、これらの過程を支配する時間単位は長くてもせいぜい一二年のようである。もとより、背景にあるトレンドは、都市化であり人類の自己家畜化であると思われる。入試も設定された目的であり、さらに、公務員試験、司法試験など、試験合格のために特化した塾が繁盛している。今の子供は、幼児・児童の段

³ただし、ここでは、例えば、ある話題に対する児童の理解の実証的研究というようなことを必ずしも意味しない。客観化の目的は、客観化の成果としての適切なモデル — 客観化対象の記述・操作のための適切なパラメータの選定とその運動法則の導出、及び、適用限界の決定 — の提示なのである。しかし、よく工夫され準備された研究調査は、もちろん必須のことであり、しかも、対象が発達途上にあることを配慮して調査の結果が悪影響を残さないような配慮が技術として確立していることも不可欠である。特に、後段に関しては、これも身体感覚的ではあるが、小生の幼稚園時の記憶 — クリスマス会での劇中での駄洒落：「飽くまで」と「悪魔で」との掛け言葉が妙な風に焼きついてしまったこと — から考えても、選択肢に誤答を含ませるようなテストを幼児・児童に行うことは倫理的に好ましいものではないと考えている。

⁴これについては、随分昔の「数学教育の会」で紹介した。

階で自然と切り離され、眼前には、いわば、社会や親のペットにふさわしいコンテストでの入賞を目指す人生が開けているのである。しかし、こういう指摘だけでは感慨詠嘆に過ぎず、少なくとも、[6]よりは進んだしっかりとした現状把握をまず実現しないと、肯定するにせよ否定するにせよ有効な対処をすることはできない（例えば、昔からそうだったよ、という意見に胡散臭さを感じてもその理由が明らかにできなければ、おかしいとは思いつつも黙るしかないだろう）。現状把握のための政策や実施方針の設定がまさに問われるところであり、当事者の見識と冷静さが要求される。

早教育にせよ、IT教育にせよ、今や、幼児や児童は、高度に技術化された人工的な世界で生まれ育っている以上、不可避であり、実際、かれらは自然体験とは縁の薄い、あるいは、擬似自然的な体験で相当部分の代替が図られるという教育環境や遊戯環境に浸かっている。今後その程度が極限まで高まっていくことも避けられないであろう。我々よりやや上の年齢層は、すでに傾向は兆してはいたが、進行自体はまだそれほどではなかったところに辛くも子育てを終えることができたともいえるかも知れない。しかし、今の子供たちでは、かれらの人間としての成長の過程に、敢えて倫理的に問題があるとまでは言わないとしても、時代が変わったから仕方がないでは済まされない、現象が生じていることが容易に想像されよう⁵。

神戸の事件は、我々より若いとは言え、余り変わらない年齢層が加害者の親であり、最近の長崎の事件では、親は大分若くなっている。小生の見解では、これらの事件について加害者の特殊性にすべて帰着することは適当なことではない。実際、それでは、見当違いの対策を産むことになるであろう。と言うのは、恐らく、同様の衝動に駆られながら行動としては辛うじて別な形で発露した少年が文字通りごまんといはずであること、つまり、このような少年たちの挙動には一種の必然性があるかも知れないことを見落としてしまうことになりかねないからである。

考えてみれば、我々の社会的行動規範は、敗戦後強調されるようになった西欧起源のものはもちろん、明治における日本的規範も、意識化され理論化されたのは奇しくも18世紀頃の理想主義、原理主義の現実化ではなかったか（これだけでは乱暴で粗雑と言われても仕方のない水準の論法だが）。今から思えば、人類の環境に対する適応の完成がこのころであったのであろう。東西のいわゆる文明国では、以来年月を掛け、しかも、多くの血を流した上で、これらの社会的行動規範が制度化され常識化されてきた。どうもそれが近代というもののようである。しかし、理念そのものが出来上がった200年前までの人類の環境は、火器にせよ産業技術にせよ、本質的に今日とは異なっていた⁶。また、生物としての人間についての理解も、個に対しても集団に対し

⁵もちろん、このような想像について、その実情を、engineering可能な水準まで、つまり、適切なモデルの獲得まで、冷静精密に調査・評価することが課題である。

⁶実は、基礎にある数学そのものさえ本質的に違うことが見て取れよう。Gaussとvon Neumannを対比させようか。

ても、当時と今日とでは違っていた。

今日の問題の多くが、上で言及した、都市化とそれに伴う人類の自己家畜化に基づくことは常識のようではある。しかし、それから派生する現象である、学力低下にせよ、少子高齢化にせよ、素直に考えれば、生物集団の存立の危機として総括できることである。つまり、生物学的には、現在の事態の進行状況は望ましい方向のものではないようである。しかも、どうもその現象が観察されるのは日本だけではないらしい。ただ、顕著に現れる国や文化社会とそれほどでもないところはあるようである。結局、生物である人間⁷の存立の条件を、生物学にまで遡及した上で、個にせよ集団にせよ、総合的に再検討することが課題ではないだろうか。また、この検討は自然科学的な論理にしたがって客観的にできるはずのことではないか。それなら後は実際に調査・研究・分析あるのみである。

参考文献

- [1] 吉川 敦. 「入学試験学」の構築を！ — 「入学試験学会」を立ち上げよう — . (数学教育の会 2003 年冬の集会 平成 15 年 1 月 12 日) 配布資料.
- [2] 芳沢光雄・米山健一・穂積悠樹. 「大学入試におけるマークシート問題と証明問題」. 日本数学教育学会誌 . 85 , No.5, 19-22 (2003).
- [3] Tom Kubiszyn and Gary Borich. *Educational Testing and Measurement. Classroom application and practice*. Wiley (2000), 6-th Edition.
- [4] 本田成親. 絵画教室にみる初等教育の問題.
http://www.kougakutosho.co.jp/column/column_4.htm
- [5] 日野原重明・養老猛司. 「なぜ、話は通じないのか」. 朝日新聞. 2003 年 8 月 1 日.
- [6] 今田明子・鈴木昌和 (指導教官) . 「数の生まれる頃 — Piaget の実験の追試とその分析」. 九州大学大学院工学研究科応用物理学専攻 (1993).

⁷ 「人間という生物」というわけではない。生活環境・技術環境が激変していなければ、人間存在における歴史原理の回復を論じることもよいだろう。しかし、環境は激変した。人間存立の基礎的な理念は、実は、歴史的社会的なものであり、その成立条件が根底から影響を受けているとすれば、恐らくは、もっとも不変の原理としての人間に関する生物原理にまで遡っての検討が要るだろうというのである。